
夢い夢の日々

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚い夢の日々

【Nコード】

N3970M

【作者名】

K

【あらすじ】

好きだった。しかし死んでしまった少女の夢を見続けた少年の話。

「REVIVE」

「死にたくない。まだ死にたくないよ。助けて隼人」

最後にそう言っであいつは俺の目の前で死んでいった・・・

2010年4月9日

「あー・・・またあの夢か・・・」

17歳の少年、鉄 隼人《くろがね はやと》はいつも決まった夢を見て、そしていつも決まった時間に目覚めていた。

時計を見るといつも通り午前4時30分だった。

「起きるか・・・」

まだ暗い中準備をし、ある場所へ行ってから学校へ行く。それが隼人の生活だった。

鏡で自分の顔を見るとひどくやつれているのがわかった。目の下にはくまがあり、顔色も悪い。

「ひでえ顔してんだな・・・」

そう呟いて支度を続けた。

準備をすべて終え、隼人は家を後にした。

隼人は三年前に死んだ、立花 暁《たちばな あき》という少女の墓参りを毎日欠かさず行っている。

「あのは今日はお前と同期の奴らの入学式があるんだぜ。」

「お前が生きていたらなあ・・・」

ほかにもいろいろなことを暁に話し隼人は「じゃまた明日な」と言
って学校へ向かった。

なぜだかそこには暁はいない、隼人はそんなような気がした。

いつものように学校に一番に到着し、今日は学校が始まるまで屋上
でのんびり過ごそうと思い向かった。

立ち入り禁止の文字に目もくれず屋上のドアを開けようとすると、
なんだか懐かしい感じがした。

不思議な感覚を覚えながらドアを開けると、一人の少女がいたのだ
が、突然ふっと消えてしまった。

だがその少女の姿はまるで・・・

「MY FRIENDS」

キンコーンカーンコーン

「やべっ。もうこんな時間か。」

隼人はあの後屋上でずっとさっき見た少女のことを考えていた。あの姿はどう見ても死んだ暁だった。

「いや、そんなはずはない。ちょっと疲れているんだろう。」

そう自分に言い聞かせ急いで教室に戻った。

「ぎりぎりセーフ」

そう言って教室に入ると親友の佐々木ささき 巧たくみと新山にいやま 明あかりが話しかけてきた。

こいつらは小さいときからの知り合いで小学校、中学校も一緒だ。

小さい頃はよく死んだ暁と4人で遊んでいた。

「お前今朝どこに居たんだよ。結構さがしたんだぜ。」

「そうよ、あんたを探してたせいで今朝はずっと巧と一緒にだったんだからね。」

巧は何か言いたげな表情で明を見ているが、明は目も合わせなかった。

た。

「ごめんちよつとな。」

そう言うとき明は「今度から気をつけてよね。」と言った。

巧は「まあ気にしてないし、いいってことよ。」と言って笑っていた。

「あのさ・・・」

隼人は今朝会った少女のことを話そうとしたが、そこらなかなか口が動かない。

「どうしたの？」

明が不思議そうな目でこっちを見ている。

「ちょっとさ、後で話があるんだけど・・・」

そういうとき二人ともうなずき、「何の話？」といった瞬間

ガラガラと教室のドアが開き担任の先生が入ってきた。

「HRを始めるぞー、席に着けー。」

「やべっ、じゃーまた後でな」といって2人は席に戻っていった。

「今日は入学式です。」

そんな担任の話も聞かず隼人は今朝のことをどう伝えようかそんなことを考えているとHRもあつという間に終わり隼人達は入学式に行われる体育館に向かった・・・

「MY FRIENDS」(後書き)

どうも上手く書けませんね。

もしよかったら誰かアドバイスをお願いします。

「DEBATE」

「ここは？」

気づくとベッドどうやらここは保健室らしい。

「気がついた？」

そこには明と巧が居た。

「もう入学式の途中に倒れるから心配したじゃない。」

「ごめん」

そう言い、倒れた時のことを思い出す。確か入学式の途中の新入生代表のあいさつを今朝の少女が始めてそれを見て倒れたのか。

「ねえ」

「隼人が今朝言ってたのってあの子のことでしょ？」

「私びつくりした、何気なく聞いてたら暁ちゃんそっくりで、そっくりって言うか仕草とかなんかまるで本人みたいなんだもん。」

「俺もそう思った。あれはまるで暁本人だった。」

何故か巧も会話に入ってきた。

「それでさ、あの子いったい何者なんだろう？」

明が二人に聞くようにして話す。

「きつと暁の分身なんだよ！」

「もう、真剣に考えてよね！」

巧の空気読めない発言でより空気が死んだ気がする・・・

「でもなんだろう？そっくりさんじゃかたづけられないし・・・」

どうやら明は真剣に考えてくれてるらしい。

その後30分ぐらい話したが彼女の正体はわからなかった。

「ええい、もうこうなったら明日本人に直接聞いちゃいましょう。」

「ええ！それは早すぎるんじゃない？」

巧と声を合わせて言う。

「何言ってるの、善は急げっていうでしょ。さあ行くわよ明日。」

結局、明に押し切られ、明日彼女の教室に行って話を聞くことになってしまった。

隼人は不安に思いながら、彼女の正体がわかると思うと、少し明日が待ち遠しくなっていた・・・

「DEBATE」(後書き)

次回ついにあの彼女が登場です。

「QUESTION」

「助けて、ねえ助けてよう。」

少女の体に火がつきはじめた。

「熱いよう、隼人助けて…」

助けようとするが、足がすくんで動かない。

どんどん少女についた火は大きくなっていった…

2010年 4月10日

「わあっ！」

隼人はどうやらいつもより長く夢を見ていたようだ。
時計を見るともう6時だった。

「やばい遅刻だ！」

急いで準備をしたがやはり時間がなく今日は暁の墓にはいけなかった。

学校まで歩きながら隼人は、どうして今日はいつもより長く夢を見たんだろう。そう考えていた。

学校に着くと、もう明と巧がいた。

「おっす」

巧が話かけてきた。

「おはよう」

「今日の昼休みに会いに行くよ」

明が突然話しかけてきた。

どうやら朝から二人で彼女のことを話していたらしい。

「クラスとかってわかるのか？」

「たしか1年1組よ。」

などと話してるうちにチャイムがなってしまった。

「んじゃ昼休みにね。」

そう言っ明は席についた。

昼休みになるといきなり

「よし、行くわよ。」

明がそういった。

「行くしかないのか…」

覚悟を決めて1年1組の教室へ向かった。

教室に着くとそのへんにいる人を捕まえ、昨日の彼女を呼んでもらった。

「あのー、なんですか？」

そう言っただけで彼女は現れた。

「単刀直入に聞くけど、あなた何者なの？」

明、単刀直入すぎるだろ。そう思いながら彼女の回答を待った…

「QUESTION」(後書き)

すみません。

あまり少女だせませんでした。

次回こそ少女の名前公開！

「MEETING」

「今日も来ちまったなあ…保健室…」

巧はそう呟いた。

「いったいなんなの？」

明が怒り口調で言う。

ベッドには一人の少女が寝ている。
まるで死んでいるように寝ているが、一応呼吸はしていた…

（1時間前）

「何者と言われても、ただの1年1組の生徒としか言えません。」

少女は困ったような顔をして言った。

「名前は？」

巧が聞く。

「ハルと申します。」

非常に礼儀正しいな、隼人はそう思った。

「ああもう！そんなとききたいわけじゃないの！あなたは立花
暁となにか関係はあるの？」

明はそう叫んだ。

その瞬間、明らかにハルの様子が変わった。

「え？あなた誰？誰なの、暁って？違う私は暁じゃない！私の名前はハルよ！」

ハルは急に叫び始めた。

なんだか何処を見ているのかよくわからない。

「何なの熱いよぉ！助けて！」

ハルは、隼人にしか聞こえないような声で最後に言った。

「助けて隼人…」

そう言っただけハルは倒れた…

「どう見ても暁の名前を出してからだよな、彼女がおかしくなったのは。」

巧がいつもと違って真面目なことを言う。

「やっぱりこの子と何か関係あるのかな？」

明が言う。

だが隼人にはわかってしまった。
倒れる前のあの助けを求める顔、あれは暁だった。

「いや」

二人の視線が隼人に向かった。

「あれは暁だ」

え！？という顔をして二人共こっちを見ている。

「でも暁ちゃんは死んだはずじゃない。」

「そうだ。俺もここがわからない。暁は死んだ、でもあれは確かに暁だ。」

「なんか頭がこんがらがってきたなあ。」

とりあえずハルは明にまかせて隼人はもう少し考えることにした：

「MEETING」（後書き）

読みづらくてすみません。できれば感想よろしくお願いします。

「REMEMBER」

隼人はハルを明にまかせて暁のことを思い出してみた。

彼女は両親との3人暮らしだった。

彼女には友達がいなく学校が終わるとすぐに家に帰る、それが当たり前だった。

そんな彼女と隼人達が出会ったのは、隼人達が小学2年生の時だった。

隼人達はいつも暁の家の近くの公園で遊んでいて、暁はいつもそれを見ていた。

そんな彼女に気づいた隼人が暁を誘って一緒に遊んだのだ。

それ以来彼らはいつも一緒に遊び、全員同じ中学に通っていた。

そんなある日、暁は小学生の頃から好きだった隼人に思い切って告白をした。

隼人は、いいよとだけ言って2人はつきあい始めた。

隼人が高校3年生になった時にあの事件は起きた。

暁の家が火事になったのだ。

暁の家族は3人とも逃げ遅れてしまっていて、隼人はそれを助けるために家の中に入った。

だが予想以上に火が強く中に入っても何も見えなかった。

だが隼人は暁だけは見つけて助けようとした、だがそんな時間はなかった。

隼人は後からやってきた消防隊員に救出された。

しかし暁だけは助からなかった。

その日から暁の助けを求める声が耳から離れなくなり、毎朝その火事の夢を見るようになったのだった。

「はや・・・と、隼人！」

明の声だ、どうやら眠っていたらしい。

「やっと起きたね。」

「ああ。」

ベッドを見ると、いつの間にかハルの姿はなかった。

「そうそうあの子なんだけど、ついさっき目が覚めたのよ。1人で帰らせるのは心配だから家まで送っていこうとしたんだけど断られちゃったの。」

「そうか。」

隼人は残念そうに言った。

「でもあの子とはもう一回話さないといけないよねえ。」

どうやらまた明の悪い癖が始まったらしい。

「それじゃあ明日の放課後もう一度彼女の教室に行きましょう。」

この時点でもう2人に拒否権はない。

「わかったよ。」

2人とも抵抗はあきらめた。

「んじゃまた明日、学校で会いましょう。」

そういつて3人は分かれた。

そう言えば今朝はいつもの夢が少し変わっていたことを思い出した。

なぜだろう、そう思いながら隼人は家に帰った・・・

「REMEMBER」(後書き)

少し読みづらかったんではと思っています。
次は気をつけるので、また読んでください。

「CONFUSE」(前書き)

どんな些細な事でもいいので感想待ってます。

「CONFUSE」

「どうして・・・どうしてなの」

「隼人なら助けしてくれると信じてたのに・・・」

2010年4月11日

「やばい、また寝過ごした!」

隼人は急いで準備をして学校へ向かった。

「珍しいな2日続けてギリギリに来るなんて。」

学校へ着くともう巧は来ていた。

「お前こそどうしたんだよ巧、いつもは遅刻してくるくせに今年に入ってから遅刻してないんじゃないか?」

ふふんと笑いながら巧は

「クラス替えのおかげでさ、あこがれた子と同じクラスになったんだよ。だからさ早く来てずっとその子のこと見てるんだよ。」

「お前それは気持ち悪いからやめた方が・・・」

「いいだろ別に!俺が悪いんじゃないくてあの子が可愛過ぎるのがいけないんだ!」

「はいはい、わかったよ。」

もう何を言っても聞かなさそうだったので巧は放課後まで放っておくことにした。

放課後になり、また3人でハルの教室を訪ねた。

「また来たんですか・・・」

ハルは明らかにいやそうな顔をしていた。

「もうここ2日変な夢を見て頭が痛いんです、だから早めに終わらせてください。」

「いや今日はあなたの家に行かせてもらっわ。」

明かりがまた唐突に言い出した。

「いいでしょ。」

強引に了解を得てハルの家に向かった。

ハルの家は学校からそれほど遠くなく、なかなか大きな家だった。

「人の家をじろじろ見なくていいので、さっさと家に入ってください。」

家の中はすごく綺麗で、ホコリなんて微塵もおちていなかった。

明と巧は家の中を隅々まで見に行ってしまったってリビングにいるのは2人だけになってしまった。

「そういえばさ、さっき言ってた変な夢っていったいどんなの？」

それがどうでもいいこととは思えず隼人は聞いた。

「えっと確か少女が熱い熱いといっていたり、助けてとか、隼人とか言っている夢です。でも暗くて少女の顔はよく見えないんですよ。」

隼人はぎよつとした。

「それってまさか火事の夢なんじゃ。」

「そうです。火がすごい勢いで少女を包んでいくんです。あれ？そういうえばあなたの名前も隼人では？」

ハルが同じ夢を見ているそれは隼人を混乱させた。

そしてリビングに置いてあったペンダントはより隼人を混乱させた…

「REALIZE」(前書き)

感想待ってます。

「REALIZE」

「あのペンダントは？」

隼人はあのペンダントに見覚えがあった。

あのペンダントと同じものを隼人は暁に送ったからだ。

「あれは…わからないの、私が気付いたら持っていた。」

「ハル！頼むよく教えてくれ！」

隼人はつい大きな声を出してしまった。

「わかりました。話しましょう。」

「といっても、私には中学3年以前の記憶がないんです。」

「だからそれ以降のことしか知りません。それでもいいですか？」

「ああ、頼む。」

隼人はあのペンダントについて聞くことができた。

「実はあのペンダント記憶を無くしたときにはもう持っていたんです。」

「だからどうやって手に入れたかは、わかりませんでした。」

「しかしよく見るとペンダントにHという文字が彫られていたんです。」

「まだそのとき自分の名前が思い出せなかった私は、これで自分の名前にHがつくとわかり、そこから自分の名前をハルと名乗ることにしたんです。」

「…」

隼人は迷っていた。

告げるべきなのか、そうでないか。

しかし意を決して言った。

「違うんだ。」

「なにがですか？」

「君が今持っているペンダントは俺が暁にあげたもので、そしてHというのはもらった人の名前じゃなくてあげた俺の名前の…隼人のHなんだ。」

「え？でもそれじゃあなんで私が持つてるんですか？」

「今の情報から必然的にこの答えが出る。」

そう、こうとしか考えられないんだ。

「君はハルではない。死んだはずだった暁だ。」

「え？う…そ…」

「君が見始めた夢はきつと暁の家が火事になったときの夢だ。」

「…少し時間を下さい。」

ハルは下を向いていて表情はよくわからなかった。

「わかったまた明日ここにくるよ。」

そう言つて廊下に出た。

廊下にはまだ巧と明がうつろしながらはしゃいでいた。

巧にいたつては、

「ヒヤホー！あ！携帯のストラップがない！」

とか叫び、走り回っていた。

「おい、二人とも帰るぞ。」

「え？話しはもういいの？」

「いやまた明日来ることにした。」

「んじゃ帰りましょうか。」

「俺、ストラップなくしたんだけど…」

「また明日探しなさい。」

そう言つて家を出た。巧は渋谷家を出て。

「また明日くるからな」

とか言つていた。

隼人は今日のことに一つ納得のいかないことがあつた。

あれが暁だとするならそれはどうしてあの火事で生きていたのか。ということだ。

「あーあ…」

隼人は今夜、眠れそうにはなかつた…

「REALIZE」(後書き)

読みづらくてすみません。

誤字、脱字などありましたら、教えてください…

「THINKING」(前書き)

更新遅くなってすみませんでした。

いつも通り、感想待ってます。

「THINKING」

隼人はこれまでの話を整理してみた。

隼人は暁が好きだったが火事で暁は死んでしまった。
それから隼人は火事の時の夢を見続けた。

隼人は今年の入学式で暁によく似たハルという少女を見つけた。

ハルは隼人と同じ夢を見始め記憶がなく、そして隼人が暁にあげた
ネックレスを持っていた。

整理するとだいたいこんなところだろう。

やはりハルは暁だろう。

しかしそこで大きな矛盾が発生する。

「いったいどうなってんだ？」

どう考えても暁が生きているはずがない。

あの火事るとき、助けに行った隼人が奇跡的に生きていたものの意識不明の重体で目覚めたのは1週間後だったというレベルだ。

しかし隼人の意識がないときに、暁の葬式は終わっていたため、実際に暁の死を確認はできていない。

「いったい、どうなってんだ？」

そんなことを言っているうちに夜が明けようとしていた…

隼人が考えている時ハルも考えていた。

「ハル。」

ハルは突然名前を呼ばれて驚く。

「どうしたんだいハル？そんな顔して？」

ハルを呼んだのは、仕事から帰った父だった。

「いやなんでもないの。」

ハルは記憶を無くしても優しい父にとっても感謝していた。

「心配しないでお父さん。」

父には余計な心配をさせたくなかったのだ。

しかし父は、なあハルと話しだした。

「もしかして、今ペンダントのことで悩んでるをじゃないか？」

ハルはうつむいた。自分はハルじゃなく暁という別の人間だ、そう考えると父の顔を見れなかったからだ。

父の顔は見れなかったが、まるで何かを決心したような声だった。

「ハル、明日は大事な話がある、だから学校は休んでくれ。」

父は返事も聞かずどこかへ行ってしまった。

多分自分の書斎に行ったのろう。

ハルは、明日の父の話が気になって眠れず朝をむかえた…

「CONFIDE」（前書き）

ついに10話までできました。

そしてユニーク数が500を突破しました！
読んでくれた人ありがとうございます。

「CONFIDE」

2010年4月12日

「おはようハル、昨日は寝れたかい？」

ハルはこくりと頷いて、父の向かいにあるイスに座った。

「それじゃあ、お前の本当の事を話そう。」

いつもニコニコしていた父の真剣な顔を初めて見たような気がした。

「ハル、それはお前のペンダントだ。それはお前がある人から貰ったものだ」

今ので完全に理解した、自分はハルではなく暁という人物なのだと。

「隼人ね」

ハルの言葉に父はびっくりしていた。

「隼人君に会っていたのか!？」

「ええ、高校の先輩だったから。昨日は家に来ていたわ。」

「そうか、それなら話が早い、昨日彼はペンダントに気付いたんだろっ?」

「ええ、そして私のことを曉だと言っていた。」

消えてしまいそうな声でハルは言った。

「流石隼人君だな。すべて悟ったのか…」

それなら話が早い、と言って父はついに真実を言った。

「隼人君の言っていることに間違いはない。お前は曉という人物なんだ。」

「まったく明日また行くって言ったのになんで学校休むかなあいつ。」

今日は明と巧は忙しいため隼人は珍しく一人でハルのクラスに行ったがクラスメイトに欠席だということを伝えられ、仕方なく一人でハルの家に向かっていた。

ハルの家に一度しか行っていない隼人は、

「あれ？道こつちであってるのか？」

などと言って道に迷っていて、ハルの家に着くのに昨日の2倍の時間がかかってやっと到着することができた。

そういえば巧のストラップも探さないと、と思いつつ家のベルを鳴らすと、

「どうぞ。」

という隼人にはなんだか聞き覚えのあるような低い男の人の声が聞こえてきた。

誰だったかな？ 有名人じゃないし、なんて考えて隼人はその人物と再会し隼人は驚いた。

「やあ久しぶりだね隼人君。何年ぶりなのかな？」

隼人は何故ここに暁の父がいるのだろうかなどと思いながら。

「どうも、暁のお父さんお久しぶりです。」

なんてしどろもどろになりながらもなんとか返答をした。

「まあいろいろ疑問はあるだろうが、いすに座りたまえ。」

隼人は椅子をひき、暁の父の目の前に座った。

「さて、もう君は気づいているのだろうか？ 何故ここに私が居るのか、そして何故あのペンダントをハルが持っているのか。」

隼人は首を縦に振るという動作だけをした。

ここまでくるともう簡単な話だ、ハルは暁であるからペンダントを持っているのであって、そして暁の父だからハルの家に居るのだ。

「うむ、ならば私が今話すべきことはただ一つ、暁がどうして生きているのかだろう？」

「はい、お願いします。」

隼人は力強い声で言った。

これですべてがわかるんだ、隼人はそう確信して暁の父の話を一字一句聞き逃さないようにすることにした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3970m/>

儚い夢の日々

2010年10月21日05時05分発行